

## あなたの笑顔がきっと誰かの薬になってる

岐阜県立多治見看護専門学校 3年生

鷹見 千春 (女)

こんな看護師になりたいと思わせてくれたある患者さんとの出会いがあった。私は人と関わることに苦手意識が強く、また、何をすることも不安を感じてしまう性格である。そのためコミュニケーションが実習で一番大変だった。そんな私とその患者さんと出会ったのは、2年生の実習中である。その時は、援助といえば清潔援助しか浮かばず、患者さんの役に立っていないのではないかと不安に思いながら毎日清拭ばかりを行っていた。しかし、いつもと同じように患者さんのもとへ行くと、「今日もありがとう。待っていたよ」と声を掛けてくださった。私が「こんなことしかできなくて申し訳ない気持ちで一杯です」と思ったことをそのまま患者さんに伝えると、患者さんから「そんなことない、僕はあなたの姿を見るだけで安心するのだから」と返ってきた。この言葉を聞いて、不安と緊張の毎日だった私は、患者さんの前で涙を流してしまうほど嬉しかった。この日から、私の看護に対する気持ちは変わり、コミュニケーションの大切さを感じることもできたし、ただ寄り添うことでも患者さんに何らかの影響を与えることはできるのだと思えるようになった。言葉というのは、人の心を大きく動かす力を持っており、患者さんの言葉は私が看護師を目指していける大きな原動力になっている。

看護するには、正しい知識と確実な技術を持っていることは当然で一番大切なことと思うが、患者さんと出会ったことで、それだけではない、心と心のつながりが大切であると教えられた。またそれは、病気そのものではなく、患者さんの病気と闘おうとする力に作用するのだと感じることができた。私が患者さんを思い何かをすることと、患者さんがそれを受けて頑張ろうとしてくれること、頑張っている姿を見てまた自分も患者さんのためになりたいと思う、この相乗効果がよりよい看護となっていくと学ぶことができた。

また、多くの出会いのなかで忘れられない言葉はたくさんある。ある施設で一人の利用者さんからの言葉は、看護師として働くうえで大切にしていきたいと思う言葉である。それは「あなたの笑顔は、きっと誰かの薬になってる」という言葉である。言葉だけではない、一緒にいること、一緒に笑いあうこと、それが心の薬になっていると教えられた。

私たち人間は一人ひとり性格も考え方も価値観も生活背景も違い、誰一人として同じ人間はいない。その人が何を望み、私に何を求めているのか考え個別性のある看護ができる。患者さんと出会い、患者さんの言葉で自分が変わり、私と出会い患者さんが変わっていくことを実感し、人が人に与える影響の大きさを知った。人に必要とされる仕事がしたいと思った過去の自分は、自分の存在価値を知ろうとしていたと思う。しかし今は、人に必要とされ、また私も人とのつながりを必要としている、そういった関係性で看護ができることがよりよい看護だと気がつくことができた。